

聖問に対する二つの評価

服部 淳一

## 聖岡に対する二つの評価

服部 淳一

浄土宗第七祖了譽聖岡は浄土宗中興の祖と称されながらその評価は表題のように二つに分かれる。本稿ではこの二つの評価の内容と評価の出発点と影響を考えてみたい。

聖岡（一三四一—一四二〇）は常陸国久慈郡岩瀬城主白石志摩守宗義の子として誕生したが、父の戦死により瓜連常福寺の浄土宗第六祖了実について出家する。その後第五祖常陸太田法然寺の蓮勝、相模桑原道場の定慧のもとで浄土宗義を学ぶことになる。二十五才から十三年間京都奈良等に遊学し各宗の教義を学ぶ。その成果である著書は『浄土真宗付法伝』『釈浄土二藏義』『伝通記糅鈔』『選択伝弘決疑鈔直牒』『教相十八通』『往生記投機鈔』など三十種百三十五巻に及ぶ。その功績は聖岡教判と呼ばれる二藏二教二頓判の成立、浄土宗の僧侶養成システムである五重伝法の構成（江戸期に在家向けの五重相伝も出来る）等があり、江戸期

の檀林修学の基本となっている。

### 一、二つの評価

その評価とは著作の表現法が「随自顕宗」と「随他扶宗」の二つに分かれるという指摘からくるものである。この端緒になったのが寛延元年（一七四八）成譽大玄によつて著された『浄土頌義探玄鈔』である。ここで示された二つの評価が以降影響していく。大玄（一六八〇—一七五六）は飯沼弘経寺、太田大光院、伝通院を経て増上寺第四十五代住職となる。当時の退廃的な宗内の状況を歎き、『浄土頌義探玄鈔』を始め、『蓮門学則』『円戒啓蒙』『円布顕正記』等多くの著書によつて戒律の是正を志し、円頓戒の復興と宗風の更正に努めている。この一連の働きの中で聖岡に対する評価を生んで行くことになる。

『浄土頌義探玄鈔』は『釈浄土二藏義』に対する註釈

書であるが、内容は大きく玄談と解釈義文に分かれ、玄談では古今の釈意には随自顕宗門と随他扶宗門があることを明かし、又「浄土宗は円教に摂するか否か」を九つの問答によって説明している。解釈義文では「大旨を明かす」と「正しく義文を解す」によって『釈浄土二藏義』（以下『頌義』と略す）における問題点を明確にしているのである。

大玄は『頌義』を解釈するにあたり、「読頌義法」のところで、

「凡そ此の書を読まんと欲せば、先ず須らく随自随他の二門有ることを知るべし。一章一段一句一字これを読むこと有るごとに、必ずまさに意を留めて此れはこれ随自、此れはこれ随他なることを了知すべし。若ししからずんば多くは誤りて自他を混同し、諸の過失を招かん」(浄土宗全書第十二卷六一〇頁以下浄全とす)として『頌義』の内容について二門の義をあげて注意を喚起しているのである。

## 二、随自随他の興起

この二門については、

「浄家の学、古今を総括するに自ら二門を分つ。一に

は随自顕宗門、二には随他扶宗門なり。随自と言うは自宗に順ずるなり。随他と言うは他家に順ずるなり。

一に随自顕宗門とは亦是経論正義門と名づけ、亦是仏祖真実門と名づく。此れ即ち鸞綽導空弁然の六祖の釈義是れなり。二に随他扶宗門とは亦是巧説護法門と名づけ、亦是対弁他宗門と名づけ、亦是建立宗旨門と名づく。所謂初分、後分、性頓、相頓、事理縦横、事理俱頓、即相不退、見生即無生、因縁品位、皆是教門、無輩品、無声菩、即成仏、実義無説等これなり。此れらの義門は随他扶宗より起れり」(浄全十二卷五二八頁)と随自顕宗門、随他扶宗門を解説している。

随自顕宗門は曇鸞、道綽、善導、法然、聖光、良忠の浄土列祖の釈義をいうのであり、随他扶宗門はそれらの説に依らず、浄土宗義以外の教説を用いて浄土宗義を明らかにして、他宗からの論難に対して自宗を高揚させる意味をもっている。

この随他扶宗門の興起について、

「支那の禅衲、躡を継いで来朝し、五山十刹金碧照曜し衣服の制、鐘鼓の声、耳を富ししめ目を悦しむ。人豁達を喜び、海内諍いて禅に入る。台宗に醍醐の上味有りといえども、彼の徒も亦諍いて禅に入り、以為

仏法復禪に過ぐるなしと。乃ち無一物を以つて認めて最上となし、法華止観を貶して方便となす。遂に立行修観を廢して著衣喫飯平常無事を真の道人となす。其の他諸宗太率これに類す。教家には自ら教家の語有り、禪家には自ら禪家の語有り。然るに諸宗の徒多く禪語を取りて各宗の義を談ず。風を移し俗を易う。唯禪のみ盛なりとす」

(浄全十二卷六〇七頁)

とあるように、禪の教えが日本に渡来し、禪が隆盛を極めたのに伴つて「禪語を取りて各宗の義を談ず」という傾向が顕著に見られたことによると述べている。大玄はこの二門を立てるにあたって五要をもつてその綱要を示している。

① 所歸の本は随自は仏願大悲を所歸とし、無量寿經四十八願を總、第十八願を別としている。随他は仏願をもつて所歸とするけれども或は実相円理を所歸の本としている

② 能入の心は随自は信をもつて能入とし、随他は信をもつて能入とし、或は解をもつて能入となす。その理由は実相を了解することは正しく円の三諦を解するによるが故としている。

③ 所歸の行は随自は浄土の要行は偏に念仏にありとし、随他は有相なりといえども或は相即無相と解し、或は生即無生と説く。これまた他家に順ずるが故としている。

④ 所立の教は随自は難行道易行道、自力他力、聖道門浄土門によつてその優劣を判ずとし、随他は事理縦横をもつて我門の教相となす。これまた彼の円門に順ずるが故なりとしている。

⑤ 所持の戒は随自は戒は仏門の通軌であり念仏の助業として随他は既に事理縦横をもつて我門の教相となす故に、円旨を解して妙戒を受持することをもつて浄土の戒となすとしている。

(浄全十二卷六〇八―六〇九頁抄記)

この五つの解釈については、円解或は円理に基づいて随他扶宗門が成り立っていることを強調している。またこれは当時の浄土宗門内における『頌義』の見方も表わしている。

三、教判成立への疑義  
その理由としては、

「我が宗の学者須らく吉水の立教と聖財論の立教と同じからざることを知るべし」(浄全十二卷五八三頁)とあるように、聖岡教判が『麒麟聖財立宗論』といわれる書物を依所として成立していることを示している。この『麒麟聖財立宗論』は「後魏三蔵法師菩提流支」の作とされているが、大玄は

「問う、麒麟聖財論は真とやなさん、偽とやなさん。答う、是れ偽にして真にあらず。其の證六有り。一に本伝に挙げず。二に諸録載せず。三に諸師引かず。四に和文にして漢にあらず。五に後師の釈を模す。六に解に邪謬有り」(浄全十二卷六二三頁)として六疑を挙げて菩提流支の真撰でないことを論証し、第五疑「後師の釈を模す」において、後世の嘉祥、天台、善導、法然などの説を模して論じたものであり、「二に嘉祥に模すとは、この論二蔵三法輪を立す。これ嘉祥に依る」と特に二蔵三法輪の教判は嘉祥大師吉蔵の説に依つたものであると示している。

又大玄が聖岡教判成立に関わる書として『建曆法語』を挙げている。聖岡が『浄土略名目図』に「源空上人説 聖覚法印記 沙門聖岡図」と明記した「源空上人説」のことであるが、この図の序文に「建曆元年

辛未八月上旬衆に示して曰く、若し浄土宗において修学の志有らん人は、諸師の中において選んで須らく三師の釈義に帰すべし。」(浄全十二卷六五九頁)として曇鸞の難易二道判、道綽の聖浄二門判、善導の二蔵二教判の三師教相を挙げており、聖岡教判の拠所としているのである。これに対し大玄は『探玄鈔』に、一に吉水の本伝及び語録等の諸書の中にこの語を載せず。二に弁然両師の語を引かず。三に玄義の文に違す。四に選択の意に違す。五に弥陀本願義疏に合す。六に財論に合す。七に相濫の失を招く。この七疑をあげて「建曆法語」の偽作を指摘している。

#### 四、他宗教義の依用

聖岡の随他扶宗の表現は、

「義主の時、五山十刹大いに天下の僧徒みな禪に帰す。禪家の所立亦山外の円教に同じ。無心絶相を最上乘の法となす。故に義主かくのごときの義を立つ。但山外の円教に順ずるのみにあらず。亦よく禪家の所立に順ず」(浄全十二卷六五五頁)として当時の仏教界の状況を説明している。山外の円教とは、宋代の中国天台宗で起こった智顛の所説に対する論争で山家派と山外

派の学問の系統が派生したもので、義寂の系統である四明智礼は自らの正統性を主張して山家派と称し、志因の系統を山外として華嚴等の他宗の影響を受けていると批判している。

円教に依つた理由として、「問う、山外に順ずるの時、何が故にかくの如きの義を立つるや。答、山外の計する所の三賢十地等の一切の差相を立つるを別教以還の法となし、未だ真の円教となさず、所有の差別を亡泯するを立てて円教となす。故に三輩九品三道四果十地三賢等の一切の差別を亡泯するは、是れ彼の円教に順ずる故なり。すでに輩品声菩を泯ず。往生即仏言わざらんはあるべからず。故に往生即仏の義を説く」(浄全十二巻六五五頁)といい、禅宗的所立については「禅徒の云く、吾が宗は機知を泯絶す。是れ格外の別風他宗の談ぜざるところなり。浄家の法門は但その修行の厭穢欣浄指方立相とるのみならず、往生位後の果を言う時も亦輩品声菩種々の差別あり。是れ浅近最劣一つも取る所なし。故に寓宗と名づけ付庸と名づけ、七家の列に加えざることまた宣となり。義主の云く、豈但汝が宗のみ無相空寂を真の法門となさん。我が宗も亦無輩品無声菩往生即仏を談ず。是れ実義なり、其

の輩品差降を説くは且く娑婆の教門に約す。実義説にあらずと」(浄全十二巻六五五頁)いうように、円教と同様に差別観に対する批判に対応するために論じられたと述べている。

更に大玄は当時の宗内状況を、

「後人智解浅短にして其の玄奥を探ることあたわず。私情に任せ臆見に誇り、邪解妄説止だ一二三のみならず。或は誤りて他宗をもつて自家に混するものあり」(浄全十二巻六〇九頁)或は「近世の人ただ臆見に任せて経論の正義を得ざるもの浪に他家に趨て鸞綽導空の章疏を読まざるが故なり」(同六一〇頁)或は「近世浄宗の人多く此れに類す。其のことに曰く、吾円眼を開きてこれを見れば、三経一論浄家の諸疏皆これ円教なりと。はなはだしきは鸞綽導空皆これ円人なりと(中略)今汝身を論ずれば則ち鸞綽諸相の門下に在り、心を論ぜば則ち天台賢首の左右に侍す」(同五九二頁)また「近世浄家の緇流日夜円宗を学ぶことを競う。いよいよ学びて、いよいよ昧し、ついに偏円事理を以つて其の繩墨となし、相即無相生即無生即事而真事理不二不断而断断而不断百千無數の円理をときて浄教の極致となす」(同)と表現されるような状況が生まれてい

たと考えられる。

この状況を生んだ基盤として、芝増上寺を中心とした僧侶養成機関である浄土宗十八檀林の教育システムがある。名目・頌義・選択・小玄義・大玄義・文句・礼讃・論・無部の檀林課目を三年ごとに昇級するようになっており、法然教学を速やかに理解するために作成されたシステムではあるが、時代を経るにつけ本来の目的と差異を生ずるようになったと考えられる。大玄にとつては浄土宗義を理解することが、他の教義によってなされることへの警鐘であった。

大玄が『浄土頌義探玄鈔』の中で随他扶宗の表現を表明したことにより、以降の聖岡教学の評価の枠が規定されることになる。

## 五、聖岡の評価

聖岡教学に関する論文は数少ないので、聖岡の評価を解題、辞典等で散見していきたい。

『浄土宗辞典』の「聖岡」の項目では「著書や説法も多くは対外的ないわゆる随他扶宗の立場をとり、しかもその論陣は雄壮で、その言葉も鋭利で、諸宗学者から注目をあびた。その結果、多少二祖三代の綱格から

はみ出す譏りもあつたが、各宗に対する浄土宗の地位があがり、退嬰的な風潮を転換させた功績は大きく」とあり、これが現在の聖岡評価である。

浄土宗全書解題（昭和九年発刊）『決疑鈔直牒』の項に「凡そ岡師の著述には対外的（随他扶宗門）と対内的（随自顕宗門）との二方面あり、二藏略頌及頌義等は前者の代表的とは、伝書類の釈述、鈔及此の直牒の如きは後者の代表的のものと云うべし」

（千葉良導氏 浄全二一巻三二五頁）

『新浄土宗辞典』では「その方法立場は、時代思潮を考慮して釈義の立場をとり、その該博な知識と高邁な識見をもって縦横無尽に、あるいは難解の語を解し、あるいは宗要の細を究明したもの」と随他扶宗を予想させる記述となっている。

『教相十八通』に対しては「解題」で「但し十八通の教義は、恰も二藏頌義の説の如く、随他扶宗の義と思わるる点多く、二祖三代の教義とは余程異っているやうである。即ち見生無生、即相不退、事理縦横、即相無相、往生即成仏等に関する問題が、多く論明されている」

（浄全二一巻五五四頁）

これに対し昭和版「浄土宗全書」の解題では「これ

らの「随他扶宗」は寂慧の『述聞鈔』に関する『口決』及び『教相十八通』に示された「口伝相承」と併せ読むべきであり、「五重伝法」及び「伝通記録鈔」等の註疏との関係に慎重な注意を要する（浄全十二巻二七頁）と見方が違ってきている。

また『浄土宗辞典』では「十八通の釈義は、聖岡独自の随他扶宗の義によっているから、二祖三代の教義とはよほど違った点があるのは注意を要する」

『新浄土宗辞典』では「本書はあたかも二蔵頌義の如く随他扶宗の義と考えられる点多く、二祖三代の定説とやや異なるものがある」

と所謂聖岡評価といわれる表現となっている。しかしながらどの辞典でも随他扶宗と指摘しながらも「本書は浄土列祖のうち、曇鸞・道綽・善導・懷感・源信の著作のなかにある重要な教相について十八ヶ条の相承口伝を記録したものである」と「相承口伝」であることを示しているのである。

#### 六、『教相十八通』の伝書として価値

この『教相十八通』は聖岡が宗義伝承時代に寂慧上人、定慧上人からの相承の口伝を書き留めておき、こ

れに自解を加えたものに、師了実、鎌倉光明寺第四世良順上人の確認署名を得たものである。各通の最後に「右代々相承の趣件の如し」「右代々相伝の次第件の如し」「右代々相伝の旨趣件の如し」とある。この書の第十重までは善導の『観経疏』の四帖に関する記述である。第一重は散善義であり、ここでは観経と浄土宗義の関わりについて述べられているが、『浄土宗辞典』の「故の一字」の項の記述を借りるならば、

『教相十八通』上には浄土立教のよりどころは、総依三経別依一経、総依一経別依一句であり別依一句とは二者深心の一句である。その二者深心の条に一心専念の文があるのだから、深心の一句は一心専念の文に帰結し、一心専念の文は、順彼仏願故の五字におさまり、五字は故の一字におさまるとするのが聖岡の伝法の肝要となるのであって、この旨を代代相承していくのが浄土宗伝法の一つである」と記されている。

峰島旭雄氏は「了譽聖岡における随自顕宗の論理」（日本文化と浄土教論攷）の中で、「『教相十八通』の始めに説かれている浄土宗義のエッセンスは、なんら逸脱したところはなく、端的に教義の核心をあらわしたものである」と随自顕宗的な部分が多いことを指摘し、



この記述の中に随他扶宗も当然含まれてくるのであるが、「人によっては聖罔における随自顕宗と随他扶宗の論理が別々であるかのような受取り方をなし、不完全な形で、聖罔の随自顕宗の試みのうちに随他扶宗の働きを、随他扶宗の試みのうちに随自顕宗の働きを指摘するにとどまるのであるとも考えられる」とそれぞれ独立したものではなく、「試み」の内容がさまざまな見方を生むことにもなる。この原因として考えられるのは、これが所謂著作として製作されたものではないということである。あくまでも口伝を記した切紙であり、整合性を生んでないのである。特に第十重までの『観経疏』に関するものでは善導教判である二蔵二教判へと導かれる基点となったと考えられる。

浄土宗の伝法の中に規定されている書伝として「往生記」(法然)『末代念仏授手印』(二祖弁長)『領解末代念仏授手印鈔』(三祖良忠)『往生記投機鈔』『授手印伝心鈔』『領解授手印徹心鈔』『決答疑問銘心鈔』(聖罔)『決答授手印疑問鈔』(良忠)の三巻七書があるが、これを規定したのが聖罔であり、別の意思のもとに製作されたとは考えにくいのである。

## 七、随他扶宗の影響

このように一つの教学、著書においても二面あるいは多面の見方が生まれてくるのは、云うまでもなく大玄の指摘から生まれてくる。大玄はこの指摘をしながら「義主は宗門の英雄当時双びなき強記博覧にして諸家を涉獵す。聰明倫を超え、弁才類を絶す。一代の著述物を益すること甚だ繁し、誰か企て及ぶ者有らんや」(浄全十二巻六〇九頁)と聖罔の功績を認めている。

大玄が『探玄鈔』で説示したかったのは、聖罔が著作で主張しようとした目的を、江戸後期の浄土宗において見誤って、浄土宗義から離れていき、離れるばかりでなく、破壊が起きていることへの警鐘であった。しかしこの警鐘は「随他扶宗」のウエートが大きくなり、聖罔Ⅱ随他扶宗Ⅱ二祖三代の教学からは異なっているという図式が概念の中に生まれ、明治以降に定着していったのではないか。

また随他扶宗Ⅱ時代に沿って変革するという図式も生まれる。「宗学」の項で、

「宗学とは求道という面で宗乗と同心円でありながら、その根本義はそれぞれの時代に耐えうるように組織し、表現することを目的としなければならない。こ

のような学問があるべき姿としての宗学といえよう。このように考えると第二祖の弁長が通別の念仏・聖浄兼学を打ち出し聖道と浄土を徹通し、七祖の聖岡が随他扶宗の実体実義の教学を打ち出したのも宗学である。明治以来西欧の思想を受けて、改めて宗学を見直そうという動きが起こり、その代表的なものに山崎弁栄の光明主義がある。また椎尾弁匡は共生運動を起こし、浄土宗のその時代への展開を試みた。これらも宗学という視点からすれば、宗学的いとなみといえるだろう」と時代に対応する宗学として随他扶宗があげられているのである。ここにも伝統と展開の取り扱いに難しさを感じさせる。

以上のように「随他扶宗」の語意は見方によって別の意味になる。法然が浄土宗を開創して以来大きな教学的展開を見せたのが聖岡であり、後世への影響も大きいことになる。しかしながら聖岡に対する二つの評価は別々に存在しているのではなく、それぞれが影響しあっているのが聖岡の教学ということになるが、その詳細は別稿に譲りたい。